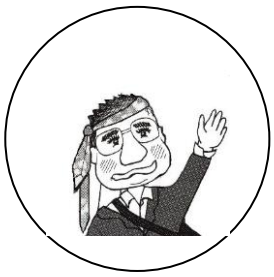
インド大魔王のエッセイ　　２０２５年８月号

大魔王のお笑い神話



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話
発行：トラベル・ミトラ・ジャパン　　ぽん子画
（530-0041）大阪市北区天神橋 1-18-25　第３マツイ・ビル 201　ＴＥＬ：06-6354-3011
お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。（E-mail：daimao@travelmitra.jp）

霧が覆い隠すシッキム王国の〝神秘〟（10）

タゴール家の別荘「チトラ・バヌ」を大地主の大邸宅「ガウリプル・ハウス」だと誤認してしまったが、その時点では全く気付いていなかった。旅の達成感満々でカリンポンでの最後の目的地に向かった。妻エレナ（1879～1955）の埋葬地である。

ニコライは神秘性を「絵画」で表現したが、詩集『モウリアの花』（1921）も出版している。タゴールに影響を受けているとされる。エレナの方が強い霊感があり著作で表現した。1924 年から 1940 年にかけて 15 巻の「アグニ・ヨーガ叢書」を出版した。どちらかというと「婦唱夫随」の神秘主義夫婦であった。

ガウリプル・ハウスから、くねくね道をあがっていくと左手にゴルフ場がある。さらに上がるとドゥルピン・ダラ丘の頂に至る。CROOKETY ハウスに展示してある当時の写真を見ると、四方八方に何もない丘の上に埋葬された。「ドゥルピン・ダラ」とは地元のことばで双眼鏡、遠望の意味であるらしい。そこからはカンチェンジュンガ高峰とティスター川が遠望できる。まさに、ヒマラヤを愛しヒマラヤに没したエレナに相応し埋葬地である。

現在はドゥルピン僧院になっている。1970 年ドゥドジュム・リンポチェ高僧によって創建された。ダライ・ラマが亡命中に所持していた 108 巻の経典が保管されている。本堂右横に白い小宝塔がある。その基壇に「Urusvati　Helena Roerich（1879・12・02～1955・04・10）」の文字が刻まれている。ウルスヴァティとは「明けの明星」のことである。ブッダは明けの明星を見て悟りを得た。エレナもヒマラヤの秘境で明けの明星を感得し輪廻から解脱したに違いない、と丘に吹く風が教えてくれた。

午後１時われら三人の車は丘を下り始めた。ティスター川の橋を渡り、２時 45 分に州境についた。パスポート、写真を提出して 45 分後に入域許可証が発行された。わが輩の話を聞いてシッキムに行きたくなった某住職夫妻は、わずか 10 分で許可が下りた。われらはシーズンの 10 月で、夫妻は 3 月初旬のシーズン前だからである。途中に州政府経営のツーリスト・ロッヂ（Oasis Café）でトイレ休憩し、ガントクのホテルに着いたのは夕暮れどきの５時 30 分であった。

ガントクは標高 1,547 ﾒｰﾄﾙ、北緯 30 度で奄美大島と同じ緯度であるが、肌寒い。

宿泊先はPandim Hotel、手配をしてくれたワンデンさんの友人のホテルである。ホテルというより家族経営の民泊のようだ。一階は小売り商店で、二階からホテルになっている。食堂は三階にある。そこからの眺めはよい。調理場の奥が家族の住居になっているようである。若いオーナーの妻と母が調理し、妹が配膳してくれた。ときおり調理場の奥から八歳位の男の子が物珍しく覗き見してくる。わが輩が見ると恥じらい顔で隠れてしまった。われら以外にフランス人女性が一人泊まっていたが、他の宿泊客はいないようであった。夕食は三人だけで少し寂しい感じがしたが、逆に家族と親しくなった。彼らはブーティア族である。その伝統的食事は、インド的香料を使わず、醤油味の田舎料理のような味がした。驚いたことに、お鉢皿いっぱいに「納豆」がだされた。インドで納豆を食べる貴重な経験をした。日本のものと殆ど変わらない。葉野菜や豆を煮たものは、小学校のころ母の実家で食べたものに近かった。（ひょっとして、日本人のルーツはブーティア族か？？？）

この辺りでシッキムの歴史を簡単に述べておこう。

シッキム王国は 17 世紀にナムギャル王朝によって建国された。僧侶王（チョーギル）である初代王ペンチョー・ナムギャル（1642-1670）によって、最初の首都ユクソム（北東インド）で統治された。1890 年に英国の保護国（藩王国）となった。インド独立 1947 年にシッキムはインドに帰属するか否かで動揺した。1950 年以降はインド共和国の保護領となった。1973 年、宮殿前で反王党派の暴動が起こった。1975 年インド軍がガントクを制圧した後、住民投票が行われ、王政が解体され、正式にインドの第 22 番目の州になった。

公用語は英語、ネパール語、ブーティア語、レプチャ語である。文化と伝統を保存する目的で、他の民族のことばも公用語とされている。

シッキムの経済は主に農業と観光業に依存している。２番目に小さい州だが、ＧＤＰでは最も急速に成長している州の一つでもある。

ホテルの食堂に数枚の古い写真が飾られていた。王と二人の男の子と娘、それに白人らしき妻と子供が映っている。わが輩は思った。

「シッキム王国は一夫多妻か？」

ホテルのオーナーによると、中央はパルデン・トンドゥプ・ナムギャル王（最後の王）で、前妻が亡くなったあと、アメリカ人女性ホープ・クックと再婚した。オーナーは彼女をジャーナリストと言ったが、当時はアジア比較人類学を専攻する学生で 1959 年インド旅行中にホテルのバーで出会った。まるで映画のような出会いである。印友のノンフィクション作家は、「ＣＩＡによって仕組まれた出会いだ！」という陰謀論をわが輩に説いた。確かに、文化大革命期の激動する中国やチベットの監視、情報収集の要衝の地であった。

パルデンは、前王の次男でもともと王位を継ぎたくなかったが、長兄の皇太子が空軍の飛行機事故で亡くなり、王位を継ぐことになった。

二人の子どもをもうけたが、1975 年シッキム併合により家族はアメリカに亡命した。その後の 1980 年に離婚し、ガンでアメリカの病院で亡くなった。

ワンチュク　ナムギャルが、父パルデン逝去のあとツク・ラカン王宮寺で(儀礼上)即位したが、主に英国に住んでいる。王族は世界中に資産をもっているが、彼はインド政府に補償を要求することなく質素に暮らしているという。「僧侶王」の王位から離れ、僧院や洞窟を好む一人の「僧侶」として生きている。

それでは、王宮に行ってみよう。